のような変わったものがあるのに，これらがどう扱われるか不明である．地元の人の研究はたとえ一部に不備があっても気にかける必要があろう．永年の初島住彦氏の努力を基にして立派な琉球の植物目録が完成した．これを基礎に琉球の植物の研究がさらに深められることを期待する．九州大学出版会 〒812 福岡市東区箱崎7-1-146．（山崎 敬）

□Werker E. **Seed Anatomy** 424 pp. 1997. Gebrüder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Berlin. DM 198,00.

種子の形態学の教科書としては，古くはNetolitzky（1926）の“Anatomie der Angiospermae-Semen”がある．その後まとまったものとして，Corner（1976）の“Seeds of Dycotyledons”が出版されている．種子の形態を種皮の解剖学的特徴（珠皮のどの層の細胞が種皮の厚壁細胞層になるかでタイプ分けする）で区分して記載するやりかたは便利であった．Cornerの教科書は植物分類学に大いに貢献してきたと言える．Takhtajan一派も種子の比較形態学的研究を精力的に行い，1980年代には教科書も出版している，ただしロシア語である．その後，種子に関しては形態学はもちろんのこと，生理学の面でも多くの知見が蓄積されてきている．Werkerによる本書は，近年得られた情報も取り入れ，種子に関し形態学が中心であるが組織の機能，種子の休眠，発芽など生理学的な面，種子の散布などのような生態学的な面もカバーする広範囲の教科書である．図，写真の引用も的をえたもので，本文の理解の助けとなる．ただしとりあげた項目が多すぎて，各論の記述が不充分な点もある．引用文献は19世紀のものから最新のものまで網羅しており48ページにわたっている．種子に関してはなんでもという感じの本で，種子に関心のあるすべての学問分野の研究者にとって有益な教科書である．（寺林 進）

□**Roth I.: Leaf Structure: Montane Regions of Venezuela with an Excursion into Argentina** 249 pp. 1995. Gebrüder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Stuttgart. DM 188.00.

本書はアンデス山系のパラモと呼ばれる植生に生育する植物の葉の形態に見られる適応戦略を具体的な種をいくつかあげて解説している．パラモとはアンデス山系北部のコロンビア，ベネズエラ，ボリビア，エクアドル北部に広がるイネ科を主とした植生で，森林限界と常雪地帯の間に位置する．雨期，乾期がある地帯もあるが，植物にとっての環境は厳しく，そこに生育する植物は独自の適応戦略を取っている．乾燥に対しては，葉を小さくしたり，巻き込むようにして蒸散をおさえたり，水をためる組織を発達させたりしている．厚いクチクラで蒸散をおさえると同時につよい紫外線から植物体を守っているものもある．各種の葉の形態，解剖の記載は詳しく，多くの図や写真がその理解の助けとなっている．（寺林 進）

□岩槻邦男：**文明が育てた植物たち** 194 pp. 1997. 東京大学出版会．¥2,400.

著者はさきに「シダ植物の自然史」を著し，自身の研究活動を跡付けながら，それを人為環境下での無融合生殖型植物の進化として総括した．本書はそれを拡張して，無融合生殖型植物の未来が地球環境，ひいては人間生活におぼす環境を予測し，人と自然の付き合いかたについて，なにかのヒントを与えようとするものである．具体的にこうせよと言えるようなことからではない．有性生殖が生物多様性の維持に果たす役割を認識させることによって，人為による環境変化に慎みをもつことを自覚させたいという意図がうかがわれる，スケールの大きい著作である．「植物たち」の見出しは，植物に興味をもつ人のための本と思われかねないが，そうではない．大学レベルの理解度を必要とする書だが，環境問題の輪読書として話題にするにふさわしい．（金井弘夫）

□堂本暁子，岩槻邦男（編）：**温暖化に追われる生き物たち 生物多様性からの視点** 410 pp. 1997. 築地書館．¥3,000

1997年の地球温暖化防止京都会議に合わせて，急遽編集された論叢である．その理由は，会議の論点が規制ガスの種類とCO_2規制の数値水準設定の駆け引きにのみに偏り，最も深刻な生物多様性への影響については，何ら話

題にされる気配がないためだった．約20名の研究者がそれぞれの立場から見解を述べているが，これらはわずか二ケ月の間に執筆編集刊行されたもので，彼らに代表される有識者の危機感の深刻さを象徴している．生物学者が単純に自然保護を唱えているだけでは足らず，社会的政治的発言をせねばならぬ時代となったこと，そしてそういう発言をするに足りる情報蓄積がなされたことを示している．表題だけを要約して並べると次のとおり．気候変動と生物多様性の未来（座談会)，温暖化と生物多様性，生物多様性の危機，CO_2排出の長期見通し，生態系と炭素循環，温暖化に伴う気候変化予測，縄文海進，高山植物群落はどのように変化するか，危機的状況にある水草の世界，海の生物たちはどうなる，魚類にとっての温暖化，ウミガメへの影響，昆虫へのインパクト，高層湿原の高山蛾，森林害虫，鳥に何が起きるか，ナキウサギは温暖化に耐えられるか，人獣共通感染症の恐怖（対談)，感染症の増加と温暖化，生物多様性を視点に地球温暖化を考える． (金井弘夫)

□山口裕文（編著）：**雑草の自然史** 234 pp. 1997. 北海道大学図書刊行会．¥3,000

雑草や帰化植物のような，どこにでも生え駆除の厄介な植物についての，専門研究者16名による研究成果の紹介である．雑草フロラの成立，適応力を解明する，生活史戦略をさぐるの3部より成り，副題にあるように‘たくましさの生態学’を解説する．とりあげられた植物はタカサブロウ，タイヌビエ，ハマスゲ，ナズナ，チガヤ，ヤエムグラ，ヨメナ，オオバコ，セイヨウタンポポ，セイタカアワダチソウ，トピックとしては雑草の起源，薬剤耐性，生育型，発芽生理，散布法，他感作用，遺伝性とさまざまである．一般むきにはちょっとむづかしいが，一応の下地のある読者には，とくに生理的な面からの説明に得るところが多いだろう．巻末に各種文献から抽出した，わが国の帰化植物105科1273種類の一覧表がある． (金井弘夫)

□ジョンストン V. R.，西口親雄（訳）：**セコイアの森** 295 pp. 八坂書房．¥2,800.

原書名は California Forests and Woodlands である．目次を見ると，針葉樹の見分け方とか下部アルプス帯の森林とか，アカモミ林とロッジポールマツ林とか生態系の名前が並んでいるが，植物生態学の本ではない．それらの生態系に生活する生き物すべてにわたる，自然観察の書である．だから植物はもとより，哺乳動物，鳥，昆虫，きのことなんでも登場し，お互いの生活のかかわり合いが述べられている．そしてかれらの生活を守るための法律や規制の方法まで記されている．カリフルニアトチノキの生活から種子の毒性におよび，インデアンによって魚毒に利用されたのち食用となること，この木の下には生育する植物は少ないが，カリフォルニアツタウルシはよく見られること．ツタウルシのかぶれの元はウルシオールだが，シカ，ウシ，ウマは食餌とすること，果実は多くの鳥の食料となるが，キツツキ類もその中に入ること．キキツツキの主な食料は昆虫で，どんな姿勢で採食するか…という具合に，あとからあとから話がひろがってゆく．ともすると混沌としてしまうストーリーが，要領よくまとめられている．口絵のカラー写真以外は，サイモン C. J. による線画で，親しみ易い印象を与える．原著者はカレッジの教師を永く勤めた人で，森林昆虫専攻の訳者は著者の観察眼の正確さにひかれたという．日本でもこういう広い実地の経験と知識のある人による，案内書がほしいものだ． (金井弘夫)

□小山鐵夫：**植物園の話** 205 pp. 1997. アボック社．¥1,286.

植物園というと観光行楽施設というのがわが国の一般的な印象で，マスコミに登場するのはきれいな，珍しい植物ばかり，その真の役割はよく理解されていない．単なる教員ローテーションのポストとしてしか利用していないような人員配置の植物園もみられる．30年近くをニューヨーク植物園で研究・教育・運営にかかわり，世界各地の植物園になじみのある著者が，自然保護，遺伝子資源，植物情報などの今日的な植物園の役割について語ったものである．まず，総合植物園，特殊植物園，植物公園の区別から始まり，ニューヨーク植物園を例として，実際の運営のとくに裏方の仕事が紹介される．次に植物園の本